

平成 31 年 3 月 1 日

平成 30 年度東洋学研究情報センター機関推進プロジェクト実施報告書（項目 1～6）

1. プロジェクト名:

「東洋学研究情報センターデジタルデータベース資源の新たな活用モデルの再検証」

2. 申請研究者

藤岡洋（情報広報室・助教）

共同研究者

大塚英志（国際日本文化研究センター・教授）

松田陽（東京大学大学院文学研究科文化資源学・准教授）

山本忠宏（神戸芸術工科大学・助教, 国際日本文化研究センター・客員准教授）

木村麻衣子（慶応大学・助教）

鈴木洋仁（東洋大学・准教授）

村瀬一志（東洋文庫・技術嘱託員）

李東真（中央大学・非常勤講師）

野口克洋（漫画家/アニメーター）

3. 研究期間

平成 29 年 4 月 1 日から平成 31 年 3 月 31 日

4. プロジェクトの趣旨、全体計画（400 字程度）

東洋学所研究情報センター（以下、センター）には現在 23 個の保守状態に入ったデジタルデータベース（以下、DB）が稼働中である。その多くは 2000 年代に構築され、アクセスログ解析によりそのすべてが利用されている状態といえる。一方 2010 年代からは徐々に DB 構築・利用の分野では新たなフェーズが模索されつつある。すなわち人文科学が従来踏襲してきた文献引用をモデルとする「閲覧」から、より積極的に研究活動にコミットする新しい形の「活用」への拡張を模索する動向である。そこで本プロジェクトでは公開状態の DB の「活用＝継承」の新たな可能性を検証したい。現在、センターDB でこのフェーズに基づいているものはなく、また国内外のほとんどの DB が同じ問題を抱えている。

本プロジェクトは同様の問題に取り組む所外 DB 運用プロパーをはじめ、同様の関心をもつ文化資源論はじめ多彩な研究者とともに問題の検証と解決方法に取り組む。

5. 今年度の研究実施状況（400 字程度）

今年度は前半に二度ほど本情報研究センター（以下、センター）所蔵の漢籍データベース（以下、漢籍データベース）に関連するごく小規模な検討会を実施した。漢籍データベースは規模また利用者の多寡の点において本情報研究センター最大のデータベースであることもある関係で本センターデータベース前管理者に依頼しているバックアップサーバ構築の遅延が生じているものの、共同研究者による利用実態に即した漢籍データベースに関するリポートの構想は着実に前進しているものと考えている。

今年度後半には北海道大学の招聘に応じ人文系研究者による git 研究会に参加。人文系研究では理系研究分野に比べて比較的、研究者の研究経過についてのアーカイブ化が有効であるという考えから VCS の活用は有効であると考え。この点で今回は申請者のみの参加であったが、このセッションは関連分野発展への取組（大型プロジェクトの発案・運営、ネットワークの構築 等）にとって萌芽となりうると考えられる。

6. 今年度の研究成果の概要（400字程度）

本研究所のデータベースに関しては、全国に散財する大小様々な漢籍データベースの利用実態について共同研究員から報告を受け、日本でも最古の構築事例である本研究情報センターの漢籍データベースの将来に向けての議論を行った。現状のデータベース運用を維持しつつも、文字コード問題などを解決した上で、共同研究者の進める現在の漢籍データベースの利用実態にも沿う形でデータベースを新たにリブートさせるための方途を今後も検討していく。

今年度後半には北海道大学メディア・コミュニケーション研究院の招聘に応じ、研究データの時系列的整理／アーカイブ化のセッションにアドバイザーとして参加した。本来プログラムの共同開発に用いられる `git` を人文系研究に定着させるのには未だ時間とアイデアが必要であるものの、VCS(Version Control System)は研究者自身の時点への思考へ一気に遡ることを可能にすることを始め、有効な手段であることは間違いなく、引き続き本プロジェクトでも臨床的に検討をする。